

母子の絆

カネミ油症の真実

カネミ油症被害者を見捨てた国、その罪を問う

1968年(昭和43年)、西日本一帯で食中毒事件「カネミ油症事件」が発生。ダイオキシン類「PCDF」(ポリ塩化ジベンゾフラン)という猛毒物質が、カネミライスオイル(米ぬか油)に混入したことにより、数万人の被害者を生み出すことになった。

国(厚生省・当時)が初期対応を誤り、事件から56年経過した今も、解決しないままだ。カネミ油を口にした本人だけでなく、子や孫の世代まで被害が広がっている。すべてのカネミ油症被害者の救済のために、今なにができるだろうか。



映画の内容

長年カネミ油症の被害を抱え、悩み、苦しんでこられたカネミ油症被害者の方々の証言、母体から胎盤を通して胎児にダイオキシン類の猛毒物質が移行したと話す研究者と医師たち。語りは松崎謙二、円地晶子、菅原あき。監督は「二重被爆～語り部・山口疆の遺言」「奇跡の子どもたち」「憲法を武器として」「日高線と生きる」を手掛けてきた稲塚秀孝の第13作目、渾身の作品です。

監督・プロデュース 稲塚秀孝

製作：タキオンジャパン ©TAKIONJAPAN 2024

母子の絆

カネミ油症の真実

高級白絞油



カネミ油症事件とは

1968年（昭和43年）に西日本一帯で起きた食中毒事件。
原因は、カネミ倉庫（福岡県北九州市小倉）製造の「カネミライスオイル」でした。

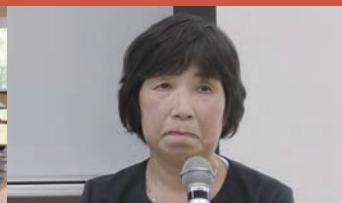
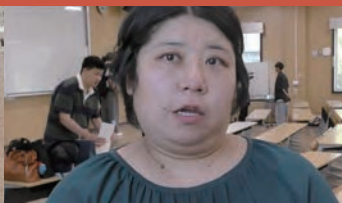


この事件は、1968年10月10日付朝日新聞（西部本社版）によって明るみになりました。紙面には、「正体不明の奇病」、「からだ中に吹出物」、「米ぬか油が原因？」の文字が踊りました。きっかけは、10月4日、市民が福岡県大牟田保健所にカネミライスオイルを持ち込み、食中毒ではないか、と訴えたことでした。

福岡、長崎、山口、広島など、西日本各地で顔や全身の吹出物や手足の痛みなどさまざまな症状を訴える被害者が溢れかえったのです。



長崎県五島市に住むカネミ油症被害者の岩村定子（いわむら さだこ）さんは、19歳の時カネミ油を食べてから5年後に産んだ長男満広（みつひろ）さんを生後4か月で失いました。満広さんは生まれながらに、上唇が避け（口唇口蓋裂）、心臓の弁が塞がり、肛門の穴がない重篤の症状でした。定子さんと満広さんは同じ8月5日が誕生日。2013年に満広さんのへその緒を九州大学油症治療研究班に託し、ダイオキシン類の検査をした結果は、「満広さんはカネミ油由来ではなく、農薬が振りかかったのではないか？」というものでした。岩村さんは、同大学油症治療研究班長が「カネミ油を食べた母親から10年以内に生まれたお子さんには、ダイオキシン類の影響が大きい」と話していたことを覚えています。



【出演】カネミ油症被害者 研究者・医師のみなさん

【語り】松崎謙二 円地晶子 菅原あき

【スタッフ】

撮影：稲塚秀孝 古巣靖彦 濱本 翔 編集：伊野智文 選曲：岡本拓也

プロデューサー：藤原寿和 MA：梶江隆一 HP：森 國明 デザイン：FRAME

【協賛】グリーンコープ 【写真提供】河野裕昭 桑原史成 【映像提供】九州朝日放送

<https://hahatokonokizuna.com>